



撮影：西山芳一（表紙、並びに当ページ）、協力：山都町教育委員会

通潤橋

熊本県上益城郡山都町長原・城原

その瞬間、子どもたちの大きな歓声が響いた。通潤橋の放水口からキラキラと輝く水が勢いよく噴き出す様は圧巻だ。

熊本県山都町、五老ヶ滝川に架かる通潤橋は、橋南側の白糸台地一帯に農業用水を供給する現役の水路橋だ。谷をまたぐアーチ状の台枠（支保工）を構築し、これにそって石を積み上げ、上部に通水管を並べた後、台枠を撤去するという工法で造られた。周辺を深い谷に囲まれ、水の確保が難しい白糸台地に水を送り込むため、取水する北側の取入口と、排水する南側の吹上口の高低差を利用し、橋上に施された三本の凝灰岩製の石造通水管を通して、南側へ吹き上げるように白糸台地へ水を送っている。橋中央部からの放水は通水管内の泥や砂の除去を目的としたもの。橋は一九六〇年に国の重要文化財に指定された。

橋長七五・六メートル、高さ二〇・二メートル、この日本最大級の石造アーチ橋が建設されたのは一八五四年、惣庄屋（地域の長）の布田保之助の発案を受け、種山石工と呼ばれる石造技術集団が施工を担った。率いたのは名工宇一、弟の丈八（後の橋

本勘五郎）が補佐に当たる。既に霊台橋をはじめ数々の眼鏡橋の架橋で腕を磨いていた兄弟の集大成となる仕事だった。

通潤橋は周辺地域に暮らす大勢の人力により、約一年八カ月をかけて竣工。「維持管理は通潤地区土地改良区の方々が担ってくださいています。農家の皆さんも含め、地域全体で連綿と受け継がれてきた水を採用する精神があったからこそ、今の通潤橋の姿があります」と山都町教育委員会の大津山恭子学芸員は話す。水を通わせ、台地を潤す水路橋は、二〇一六年の熊本地震で大きく損傷。復旧工事を終え、昨年四月からの再放水はコロナ禍もあり延期となったが、七月に多くの人に見守られ記念放水を果たした。

灌漑用水インフラとして通潤橋の威容は特筆に値する。「左右岸で橋を支える鞘石垣（さやいしがき）という擁壁は、熊本城の石垣を参考に造られたのは明らかでしょう。下流の白糸台地につながる用水路も複雑に枝分かれしていて、この水路橋とともに灌漑施設全体が当時の土木技術の粋を集めた構造物だと言えます」。それにしても立派な水路橋ですよねと、大津山学芸員が笑いながら教えてくれた。

